

## 胃切除後、経口摂取困難にて経管栄養であった患者がNST介入により経口摂取可能になった事例

津生協病院

薬剤師：小菅美佳 看護師：長野恵美 川崎奈緒美 管理栄養士：猪田秀子

小家育子 岡本良子 医師：山村剛史 宮崎智徳

「1.目的」経口摂取への意欲低下により、経管栄養に頼っていた患者がNST介入により経口摂取可能になった症例について報告する。

「2.症例」89歳女性。胃癌の胃全摘Ope後。術後は良好であり、通過障害認めないものの経口摂取進まず、他院より転院。嚥下機能に問題はない。腸ろうを造設にて、腸ろうよりメイバランス1日6本注入。身長153cm、体重40kg、理想体重51.5kg、BMI17.1、活動係数1.0、ストレス係数1.0、現在の必要エネルギー量914kcal、ALB3.1

「3.経過」入院後、家人の希望もあり、腸ろうからの栄養減らし経口摂取へ切り替えるためNST介入。食欲増進を期待し、ペリアクチン内服開始し、嚥下A食トライする。本人から食事に対し積極的な言動聞かれないも、時間をかけて食事介助することによって8割摂取可能になった。1週間後嚥下B食へ切り替えた。主治医より神経内科医（嚥下専門）に診察依頼。嚥下機能に問題はなかった。神経内科医より、クールスパン勧められ開始する。クールスパン開始後「ご飯まだ？」と発言聞かれることあり。時間はかかるものの8割摂取可能になった。経口からのカロリー確保のため、嚥下食からソフト食へ切り替えた。腸ろうからはメイバランス4本へと減量した。食べることを優先するため、夕食後消灯時間に経管栄養をつなぐこととした。現在体重38.5kg、ALB3.0

「4.考察」NST介入により、徐々に経口摂取が可能となってきた。また、神経内科医も介入することで食事に対する意欲を高められたのではないかと考える。栄養確保の視点から経管栄養後に食事を出していたが、食べることに重点を置き、食事してから経管栄養をつなぐこととした。少しずつではあるが食に対する意欲も上がりつつあると考える。しかしまだ自分から食事を摂ろうとはしない。これからも食に対する意欲を高められるよう介入していきたい。